

CASE 02 | 特別支援学校での事例

【身体の動き×視線入力支援装置】

「友だちとゲームで一緒に盛り上げたい」



視線入力支援装置を操作しやすいようパソコン画面を調整している。

○子どもの願い

- ・友だちとゲームで一緒に盛り上げたい。
- ・視線入力支援装置を活用して文字入力を行い、知らないことを検索したりYouTubeで好きな動画を見たりしたい。

○対象の子どもの実態

- ・S-M 社会生活能力検査では、移動や作業の領域に弱さ、言語表出の難しさが見られるものの、自己統制の領域は強みである。
- ・障害による筋緊張から、身体をスムーズに動かすことが難しい。
- ・新しいことに挑戦しようとする気持ちが強く、楽しいことが好きである。

○指導する自立活動の区分・項目

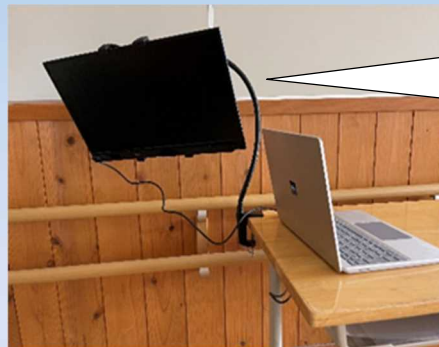
- | | |
|--------------|-----------------------------|
| 区分：環境の把握 | 項目：感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。 |
| 区分：身体の動き | 項目：姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。 |
| 区分：コミュニケーション | 項目：コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。 |

○目標

- ・視線入力支援装置を使い、文字入力やインターネット検索をすることができる。
- ・身体の力を抜き、リラックスした姿勢で視線入力支援装置を操作することができる。
- ・視線入力支援装置を活用して活動に取り組む意欲を持つことができる。

○指導内容

- ・視線入力支援装置を操作しやすい姿勢について椅子の種類、マットの分厚さ、配置、タブレットの向きなどを工夫しながら見つける。
- ・自分の視線の動きに合わせて画面の画像が浮き出てくる暗幕ゲームに取り組み、視線の動かし方やゲームのルールを覚える。
- ・視線入力支援装置を活用して友だちと一緒にゲームをする。



外部モニターとモニターアームを用意し、体調の変化に合わせて画面の位置を微調整できるようにした。



回答する側の生徒からも活発なやりとりがあり、楽しい雰囲気で盛り上がった。

○使用 ICT 機器:タブレット

視線入力支援装置

○取り組む上で工夫したことや困ったこと

①姿勢の保持について

- ・姿勢を保持する補助具はビーズクッションなど、柔軟に形が変えられるものより腰や肩回りをしっかりとサポートできるものの方が子どもの筋緊張が少なかった。

②パソコンの設置方法について

- ・子どもの体調により見えやすい位置が変化するため、パソコンの位置を変えるのではなく、外部モニターとモニターアームを用意し、その日の体調の変化に合わせて画面の位置を微調整できるようにした。

○取り組む上で工夫したことや困ったこと

③視線入力装置ソフトウェアのインストールについて

- ・視線入力支援装置のソフトをインストールする際、ファイアウォール等の設定によりインストールすることが難しかった。

④ゲームで使用する画像について

- ・ゲームで使用する画像は、友だちの好きなキャラクターや教員の顔など、子どもの身近なものにした。
- ・ゲームで使用する画像は、編集ソフトでサイズを調整する必要があった

○【成果】子ども・教員等の変化

(子ども)

- ・身体力を抜くことができる姿勢がわかり、座位よりも長い時間画面を注視することができた。
- ・視線入力支援装置を使った文字入力や検索には、長期的な取組が必要であることがわかった。
- ・視線入力支援装置を使うことで、休み時間も友だちと一緒に楽しく過ごすようになった。

(教員)

- ・子どもが画面を注視しやすい姿勢や注視の仕方がわかり、より伝わりやすい教材を考えることができた。
- ・他の場面でも、子どもの視点や動きを確かめながら、教材の提示方法をより意識して授業を進めるようになった。

○今後、自立活動に ICT 機器を活用する教員へのメッセージ

ICT 機器は子どもたちの可能性を広げる「手段」だと考える。本事例では、「知りたいことがたくさんある。自分で色々調べ物ができると楽しいかもしれない」「自分の意思で動かすことができる視線を活用して、友だちと一緒にゲームで盛り上がりたい！」という子どもの願いを叶えるため視線入力装置を使用した。伝えたい気持ちはあるものの、言葉やジェスチャーでは十分に伝えづらい子どもにとって人に頼らず「自分でできた」という結果は子どもの強い意欲になったと感じる。

また、取組の中で子どもがリラックスできる姿勢や、画面(教材)の見え方など、客観的に知ることができた。これは ICT 機器がなければわからなかったことでもあり、支援の可能性も広がった。

ICT 機器は、支援者や子ども達自身の願いを叶え、「できた」を引き出すための多様な「手段」の一つとして活用できれば良いと考える。